

## 今後は障害者の目線に立つ 黒岩祐治・神奈川県知事

痛ましい相模原殺傷事件の直後、「早く再生させなければ」と施設再建を最優先にしてきた。なぜ事件が起きたのかという議論の中で、津久井やまゆり園を運営する社会福祉法人・かながわ共同会の利用者支援のあり方に問題があったという指摘はあった。しかし、当時は掘り下げて考えることはできなかった。

施設の設置者である県としては、こうした支援現場の問題を見過ごしてきた責任がある。このため裁判が始まる前の昨年12月に自ら検証しようと外部識者による利用者検証委員会の設置を決めた。委員会では、虐待の疑いのある身体拘束が20人にされていたことなどが指摘された。

私自身も、かつてやまゆり園で毎日長時間車いすに拘束され、今は別の法人のグループホームで暮らす女性に会いに行った。その方が自分の足で歩き、生き生きとした表情で暮らしている様子を見て、施設の支援のあり方が非常に重要だと感じた。彼女は拘束されていた間、本来あった能力を封じ込められてしまっていた。ご本人の希望に沿った支援ができていなかったことをおわびした。

裁判の判決で、植松死刑囚の犯行動機に「勤務経験を基礎とし」と盛り込まれたのは、「やはりそうか」という思いだ。支援現場と事件が厳密にどうつながっていたのかは分からないが、支援の検証や改善を後回しにしてきたことを反省している。

県は現在、運営法人に対して、虐待の疑いが強いと指摘されたケースの原因究明や再発防止を求めている。これまでのやりとりでは、法人側は身体拘束の手続きや障害者虐待防止法の指針の認識不足だったと認めている。今後より本質的な改善を求めている。

また、やまゆり園の運営主体を見直すために、指定管理期間を予定より2年間短縮して、2023年度からは公募で指定管理者を選ぶ。

一方で、県自らも身を切る覚悟で検証をしていかなければならない。担当する局内に検証チームを作り、これまで県として虐待の疑いが強いと指摘された

支援の実態について、知っていたのか、なぜ放置されたのか、どこまで報告されていたのか、監査のあり方も含めて検証をしていく。

やまゆり園での虐待の疑いが強い不適切な支援は、障害者施設全体に共通する課題でもある。検証委員会を引き継いだ新しい部会では、検証の対象を県立6施設に広げた。これまでの障害福祉は「本人のため」「安全のため」と言いながら、ご本人の自由を制限してしまっていたのではないか。その反省から、利用者の目線に立った、新しい福祉のあり方を、専門家や当事者に議論していただいている。

県では入所者が今後の生活の場を選ぶための意思決定支援にも力を入れている。相談支援専門員や園の担当職員、自治体の職員らによるチームで利用者本人の選択を支える仕組みだ。こうした利用者目線の福祉が実現すれば、重度障害者でも能力を発揮し、その人らしい暮らしができるだろう。

事件を乗り越えるためにも、神奈川県から新しい障害福祉をつくっていききたい。

#### ■人物略歴

## 黒岩祐治（くろいわ・ゆうじ）氏

1954年生まれ、神戸市出身。早稲田大卒業。民放キャスターを務め、救急医療キャンペーン報道番組で放送文化基金賞など。国際医療福祉大大学院教授を経て2011年から現職。